慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ボルタンスキーにおける外在性の問題
Sub Title	
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2012
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.74 (2012.) ,p.103- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成23年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000074-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成23年度
博士課程学生研究支援プログラム
研究成果報告

ボルタンスキーにおける外在性の問題

小　田　切　祐　詞

1.　はじめに

修士論文では，社会学的社会批判の規範的次元に取り組んだ。明確に提示されてはいないものの，そこには大きく分けて二つの問題関心があった。一つ目は，社会学というディシプリンに固有の性格に関わるものである。すなわち，しばしば価値中立性を己の要件として掲げる社会学が，それにもかかわらず社会の批判的診断という意図を捨てないとすれば，記述と批判のいかなる妥協策が行われてきたのか／行われうるのかという問題[1)]。もう一つは，構築主義以後の社会学はいかに規範を語りうるのかという問題である[2)]。

本報告書は，十分に自覚されないまま伏在していた三つ目の問題関心を明らかにすることを目的とする。それは，社会学的社会批判における社会学者の位置の問題である。社会批判を行うとき，社会学者はいかなる地点に自らを置いているのか，自身の分析対象といかなる距離を形成しているのか，その地点や距離はどのように形容されるものなのか。

上記の問いに答えるための一つの準拠点として，以下，ボルタンスキー（Boltanski 2009）が提示した「単一的外在性extériorité simple」と「複合的外在性extériorité complexe」を検討していくことにしたい。

2.　複合的外在性

批判が依拠する外在性にボルタンスキーは「複合的」という形容詞を与える。それは，この外在性が二つの異なる位相に基づいて確立されるからである。一つは，記述が依拠する外在性であり，批判対象たる社会秩序を描き出すために必要なデータを与えてくれるものである。もう一つは，一つ目の外在性に基づいて記述された社会秩序に価値判断を行うことを可能にする外在性である（Boltanski 2009：25）。

後者の外在性を説明するためには，社会生活の様々な次元を経験的に記述する社会学と区別される，支配的状況を批判する理論が，いかなる特徴を持つものとしてボルタンスキーにおいて理解されているのかについて確認しなければならない。

第一に，支配の批判理論は社会学的記述なしで済ますことはできない。批判理論は記述志向の社会学と区別されると述べたが，それは概念的な意味においてである。社会学的記述は，批判の対象たる現実の記述に一定の厳密性を与えるものとして，批判理論によって積極的に活用される（Boltanski 2009：19）。

しかし，このことは支配の批判理論にある種のジレンマをもたらす。一方で，批判理論は，社会科学の真理言説を自らの支えとすることで，特定の宗教的もしくは政治的アプローチから形成された特定の道徳的資源に直接依拠して批判的判断を下すことが禁じられる。というのも，そのような資源はローカルな性格しか持たず，十分に自律した規範的支点とはならないからである（Boltanski 2009：19–20）。ボルタンスキーはあるインタビューの中で次のように述べている。「（…）規範的側面に関して，科学を標榜するあらゆる記述の普遍主義や一般性の要求と両立するためには，『支点』は十分に大きなものでなければなりません。我々はカトリックの社会学やイスラム教の社会学，共和国の社会学をつくることはできません，たとえ存在するにしてもです，残念ながら。もしそうでなければ，記述の射程が減じられるでしょう，なぜなら，我々はそこに――当然のこととして――世界のある一定の見方を守る特定の集団と結びついた位置を守るための口実しか見ることができないからです」（Boltanski 2011：472）。

だが，他方で，支配の批判理論は，まさにそのような道徳的資源に基づいて行為者が日常生活の中で展開する批判を無視することはできない。支配の批判理論は「形而上学という天空に浮かぶ抽象的なオルガノン」ではなく，人々の集合との具体的な関係の存在を己の定義の一部としているからである（Boltanski 2009：20）。批判理論は，「行為者の不満足を把握し，それを理論化の作業において明示的に考慮に入れることで，行為者と社会的現実の関係を修正し，それを通してこの社会的現実それ自体を修正し，『解放』へと向かうように」することできなければならない（Boltanski 2009：20）。

つまり，支配の批判理論は，日常的批判と自らを区別しなければならない一方で，まるでそれが日常的批判から生じるかのように日常的批判を出迎えなければならない。ただし，その際に批判理論は，行為者に，行為者がそれと知らずにすでに知っていることを認識させ，社会的現実が何から成っているかを悟らせ，まるでこの社会的現実の外に出られるかのようにこの現実と距離を取らせることで，現実を変えることを目的とした行為の可能性を考えてもらうようにしなければならない（Boltanski 2009：21）。

ボルタンスキーは，日常的批判と区別される[3)]，批判理論の規範的言説が組織化される支点を「メタ批判的位置」と呼ぶ（Boltanski 2010：472）。「メタ批判」とは，「抑圧や搾取，もしくは支配を，それがどのような様相で生起するものであれ，その最も一般的な次元において，暴露することを狙いとする理論的構築物」である（Boltanski 2009：22）。ただし，メタ批判理論と日常的批判はあくまで相互依存的なものとして理解されなければならない。メタ批判理論は行為者が表明する不満足を無視することできないし，メタ批判理論の最終的な目的は，行為者の不満足にある程度確固とした形態を与えられるようにその不満足の枠組みを再定義することにある。日常的批判を行う行為者に関しても，行為者はしばしば，自分の不満を支えるための諸資源をメタ批判理論の中に探しに行く（Boltanski 2009：83）。

ボルタンスキーは，このメタ批判理論に依拠して価値判断を行う際に用いられる外在性を「複合的外在性」と呼び，社会の記述を行う際に用いられる外在性を「単一的外在性」と呼ぶ（Boltanski 2009：23）。

3. 単一的外在性

では，記述が依拠する外在性はどのように特徴づけられるのだろうか。ボルタンスキーによれば，社会を対象にし，その枠組みを記述するためには，自らをその枠組みの外部に置くことが求められる。反対に，枠組みの内部に留まり，枠組みそれ自体を問題化しないまま記述を行う者を，ボルタンスキーは

「専門家expert」もしくは「技術者ingénieur」と呼ぶ（Boltanski 2009：23）。専門家は，諸要素間の問題的な関係（たとえば，女性の賃金労働への就職と出生率との関係）を検討するように頼まれるが，これらの要素は，企業や国家直轄の組織などの責任者が統治を行うために用いる行政的もしくは経済的な記述言語によるフォーマット化をすでに受けているのである（Boltanski 2009：23）。

専門家と社会学は必ずしも相容れないものではない。ボルタンスキーによれば，「この種の要求に応じる社会学の仕事は，1930年代から1940年代のアメリカで発展したものだが，今日，世界のあらゆるところで，社会学を標榜する生産物の大半を成している」（Boltanski 2009：23）。

社会（科）学が，諸変数が依存している一般的枠組みを問題化せずに記述を行う「専門知識expertise」（Boltanski 2009：23）と，外在性の有無によって明確に区別されるとするならば，いかにしてその外在性は獲得されるのか。民族学であれば対象との地理的距離によって，歴史学であれば時間的距離によって，観察者とその対象との距離化を図ることできる。他方，現代史と見なされうるような社会学における観察者は，自らが記述しようとしている世界に位置づけられる。このように社会学者が対象の性質を帯びているということは，ボルタンスキーによれば，次のような考えに導くことがある。すなわち，社会学者は自己分析やある種の社会心理学を行って，自分や自分のパースペクティヴの中にあるものが社会的条件の反映であり，それによって客観的になることが妨げられていることを見ようとしなければならないという考えである（Duvoux 2011）。この問題は現実に起きていることであるとしつつも，ボルタンスキーは，この種の，結局は心理学化するアプローチにはあまり納得できないと述べる（Duvoux 2011）。

ボルタンスキーが提示する社会学における距離化の方途は「思考実験」である。想像的に現実の外部に出ることは，次の二つの段階が想定される。第一の段階は，現実からその必然性の性格を取り除き，現実があたかも「恣意的な」ものであるかのような振りをすることである。第二の段階は，この最初に取り払った必然性を現実に戻すことであるが，このときの必然性は，別様可能性と関連づけられたものとなっている（Boltanski 2009：24）。そして，社会学者は，「研究室」が課す様々な要求に従う時，すなわち，自分の信念が実現されるのを見たいという意識的もしくは無意識的な欲望の障害となるような制約的な方法に訴える時，自分が行った記述に対して真理性要求を行う（Boltanski 2010：472）。

このような真理性要求は，外在性の位置から行われた記述と結びついているが故に，批判的次元をもつとボルタンスキーは述べる。なぜならそれは，社会的世界が「自然的な」ものではなく，別様でもありうると考えるように導くものであり，このことは批判への最初の一歩を構築するからである（Boltanski 2010：472）。この意味において，「社会学はすでに，まさにその概念において，少なくとも潜在的には批判的なのである」（Boltanski 2009：24）。

4. おわりに

記述だけでも社会学は潜在的には批判的たりえるのに，なぜボルタンスキーは複合的外在性や，単一的外在性と複合的外在性との両立可能性の問題にまで踏み込んだのか。この点に関する検討を通じて，近年の社会学における規範性への関心の高まりに内在する論理の一端を明らかにすることを，今後の研究課題としたい。

注

1) この視点はボルタンスキー（Boltanski 2009）からインスピレーションを得ている。彼はあるインタビューの中で次のように述べている。「私は，記述と批判的反省性との間の対立は，社会学や他の社会科学の中では時代遅れの対立であるという主張には満足しませんでした。科学におけるあらゆる対象の構築は選択という主観的な行為である，事実判断は価値判断でもあるなど，これらはある意味では正しいのですが，この問題を厄介払いする拙速な方法です」（Boltanski 2011：471）。
2) 同様の問題関心から行われた社会学の仕事として北田（2003）が挙げられる。彼は，近年の言説の布置状況を《「社会的なるものの」肥大／「政治的なるもの」の盲点化》という標語で整理している（北田 2003: iii–xvii）。それによれば，あらゆる出来事や事象を社会的文脈から説明し，相対化しようとする傾向によって，社会的文脈によっては容易に語り尽くすことのできない価値の領域，とりわけ，「国家」「正義」「自由」「平等」といった政治（学）的概念を考察することの意味が失われているという。構築主義もその一つに数えられるこのような「社会的文脈主義」（北田 2003: xiii）に抗する形で，北田はリベラリズムの可能性を探究している。
3) メタ批判理論はまた，「学的な専門知識から，修復や改良を目的として，社会的諸関係のなんらかの次元を，その社会関係が刻まれている枠組みを問題化しないまま非難する，一時的な批判的介入」とも区別される（Boltanski 2009：22）。

参考文献

Boltanski, L., 2009, *De la critique*, Gallimard
———, 2011, “Critique sociale et émancipation Entretien réalisé par Laurent Jeanpierre”, *Penser à gauche: Figures de la pensée critique aujourd'hui*, Editions Amsterdam
Duvoux, N., 2011, “Le pouvoir est de plus en plus savant. Entretien avec Luc Boltanski”, *La Vie des idées*, (http://www.laviedesidees.fr/Le-pouvoir-est-de-plus-en-plus.html)
北田暁大, 2003,『責任と正義　リベラリズムの場所』勁草書房

JR東日本における音による乗客（乗降客）の移動・態度の取り締まり

マネア・ピエール

はじめに

本報告は，著者が2009年より継続して行ってきた研究課題，JR東日本における音による乗客（乗降客）の移動・態度の取り締まり（仮名）について，2011年度の調査の一部の成果を提示するものである。

問題の所在

サービスを提供する「空間」として，電車と駅は管理行為の対象である。車内空間又は駅構内空間は「公共化する諸規範」によって規制・強制・制限されているところだと言える（田中 2007；小勝 2010）。

規制を必要とする要因はいくつかあるが，ここで挙げられる一つは，日本の駅と電車というのは，数多くの人が集合するところである。首都圏の全線では1日3600万人が利用し，JR東日本の利用者のみで1日1600万人となる。駅により乗客数が異なることを留意した上で，新宿駅のような主な駅であれ